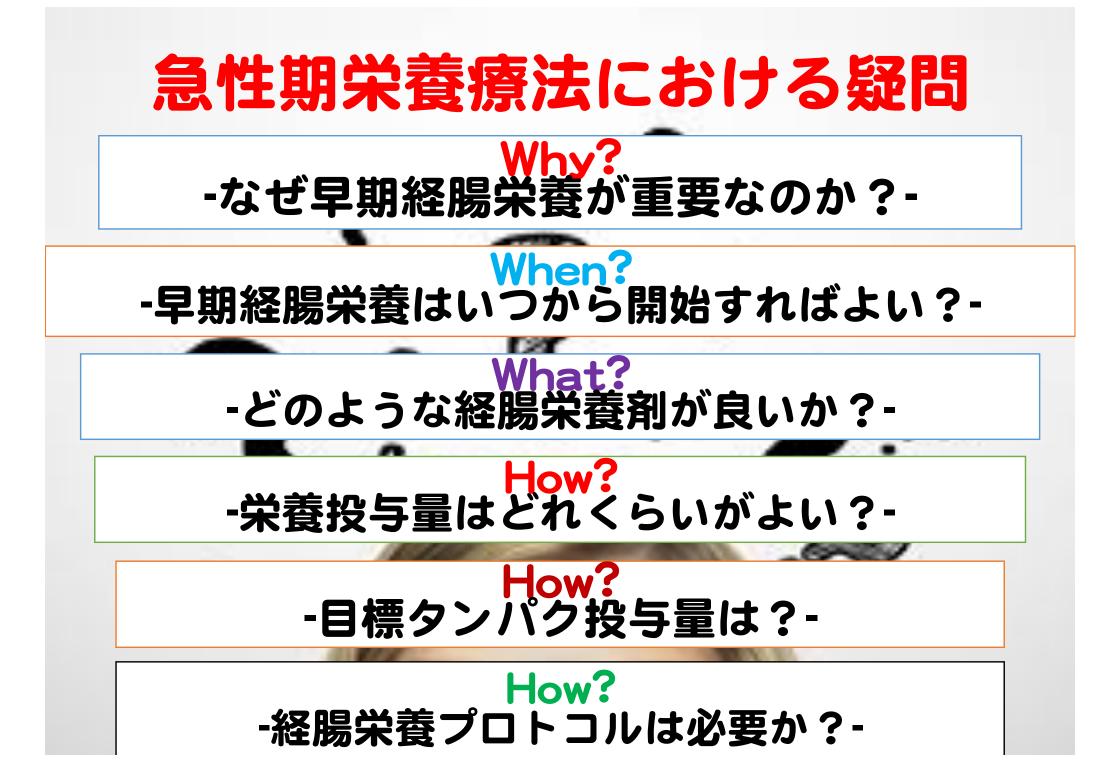


### 急性期栄養療法に必要な 5W1H -Why なぜ栄養を、When いつから、Who 誰に、 What 何を、Whereどこから、How どのように-

鲁田総合病院集中治療科 安田 英人

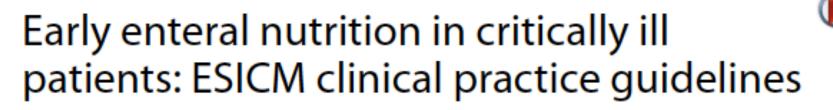


# 本日の目標

>早期経腸栄養の重要性を理解する
>早期経腸栄養の開始時期を知る
>早期経腸栄養に適した経腸栄養製剤を知る
>重症患者における適した栄養投与量を知る
>重症患者における適したタンパク投与量を知る
>経腸栄養プロトコルの必要性を知る

## 参考文献

**CONFERENCE REPORTS AND EXPERT PANEL** 



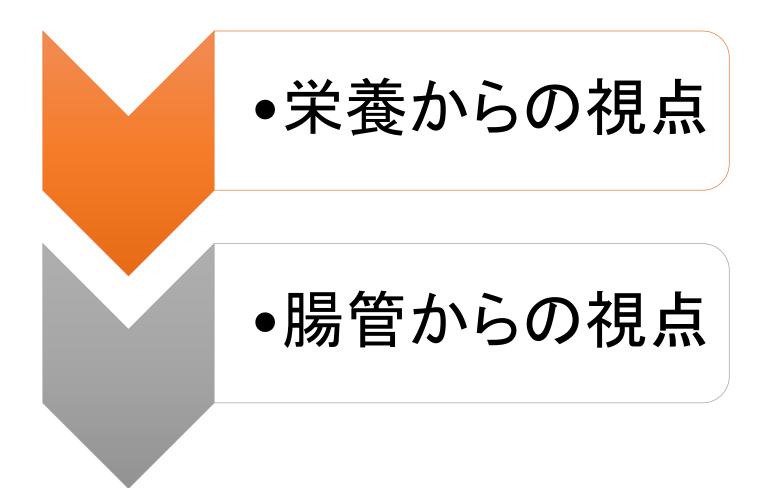
Intensive Care Med (2017) 43:380-398

CrossMark

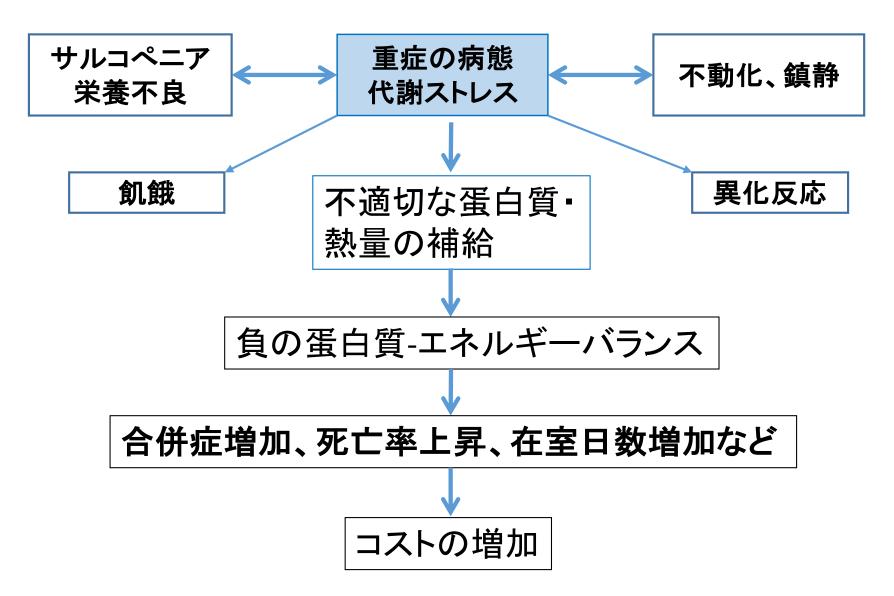
2017年にESICMから報告された早期経腸栄養のガイドライン Early ENをICU入室から48時間以内に開始されたと定義 GRADE systemを用いてsystematic meta-analysisを評価

### Why? -なゼ早期経腸栄養が重要なのか?-

### Why? -なゼ早期経腸栄養が重要なのか?-

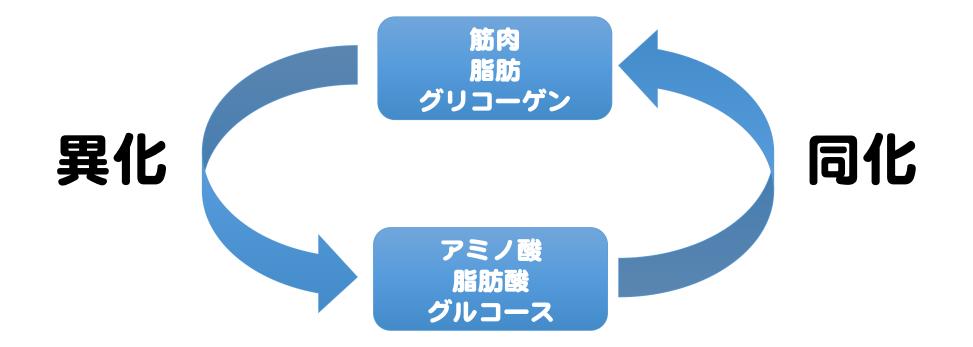


### 重症患者における栄養管理の重要性



Thibault R et al: Curr Opin Clin Nutr Metab Care.2010 13(2):177-83

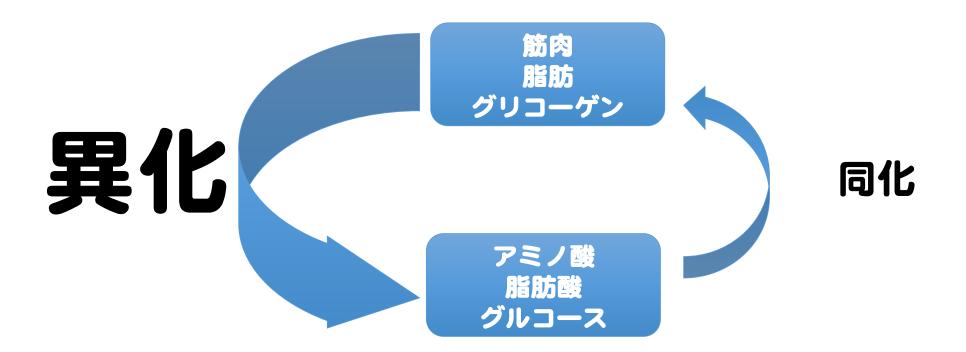
# 侵襲が<u>小さい</u>生体においては



# 異化=同化

異化により作られたエネルギーが同化により再び貯留されるというイメージがよい

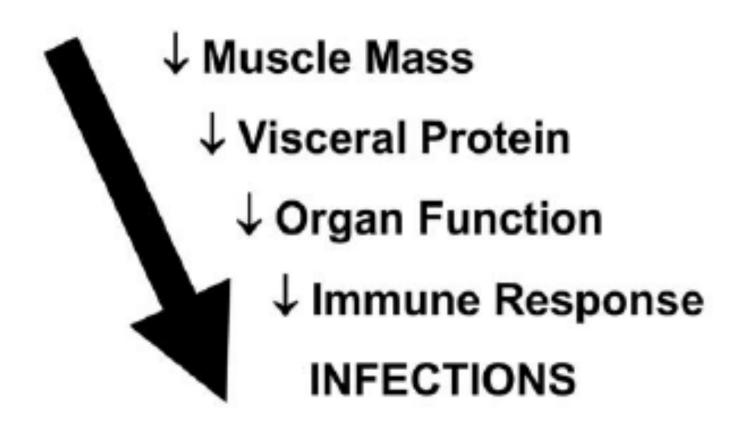
# 侵襲が<u>大きい</u>生体においては



# 異化>>同化

体内で必要なエネルギーは異化により作られる。その度合いは侵襲の度合 いによって決定される。同化はできないものと考えた方がよい。

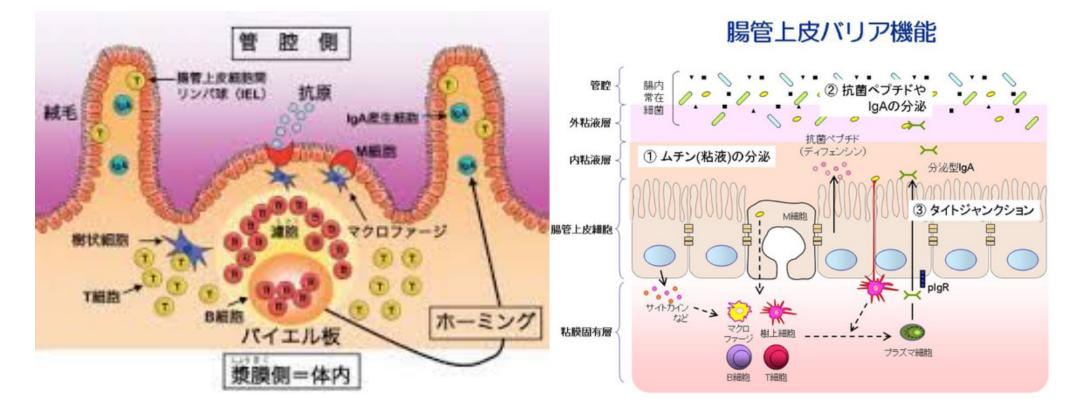
# 異化亢進・低栄養の影響



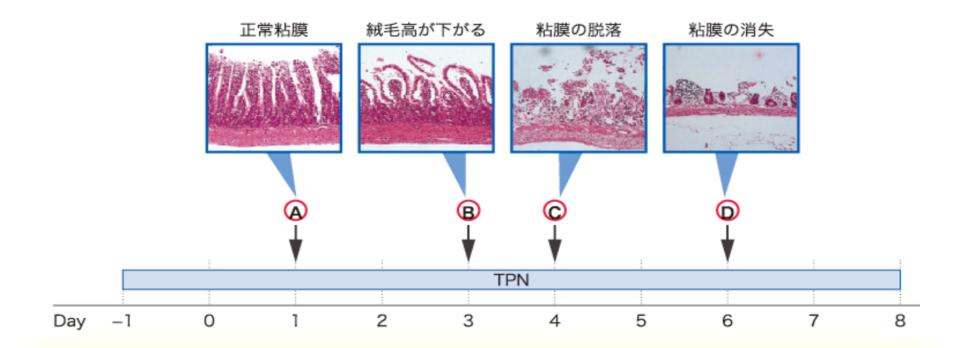
Moore FA, Am J Surg 2010:200:671-677



### "体内なのに体外"である腸管は感染防御の要



# 重症患者における腸管粘膜の萎縮



#### 腸管粘膜萎縮による免疫力低下 およびバクテリアルトランスロケーションの可能性

### <u>ー日使わなければ回復まで三日かかる</u>



栄養

- ・腸管に食物の流れが無くなる。
  - 感染予防!!
- ・腸管粘膜・リンパ組織の脱落
- ・
  勝管内から細菌の侵入および免疫力低下
- ・感染成立!!

### 腸管免疫に対する作用 肝臓免疫に対する作用 (Kupffer cell, etc)

### 早期経腸栄養の効果 vs. 経静脈栄養



#### Risk Ratio 0.95 (95% CI 0.76-1.19)

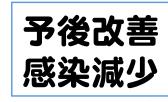


#### Risk Ratio 0.55 (95% CI 0.35-0.86)

Intensive Care Med (2017) 43:380-398

### - **When?** - 早期経腸栄養はいつから開始すればよい? -

### 早期のメリット



### 晩期のメリット

### 合併症回避

- ・肺炎
- ・腸管虚血
- ・下痢
- 腹部膨満
   胃残量

Crit Care Med 1999;27:1447-1453

## 代表的ガイドラインにみる 経腸栄養の開始時期の推奨

ガイドライン	推奨
ASPEN/SCCM (米国)	ICU入室後24時間以内に開始
ESPEN (欧州)	ICU入室後24時間以内に開始
BAPEN (英国)	ICU入室後24時間以内に開始
CCPG (カナダ)	ICU入室後24~48時間以内に開始
日本呼吸療法学会	ICU入室後24~48時間以内に開始

### 早期経腸栄養の効果 vs. 晩期経腸栄養

Cut-off: 48 hours



#### Risk Ratio 0.76 (95% CI 0.52-1.10)



#### Risk Ratio 0.64 (95% CI 0.46-0.90)

Intensive Care Med (2017) 43:380-398

# 24時間以内の早期経腸栄養の効果

Med Sci Monit. 2014 Nov 17;20:2327-35.



### Risk Ratio 0.51 (95% CI 0.27-0.94)



#### Risk Ratio 0.27 (95% CI 0.10-0.78)

24時間以内に栄養開始したら良いoutcomeかもしれない

# 疾患別早期経腸栄養の是非

>筋弛緩薬投与中
>脳低温療法中
>脳卒中患者
>脳梗塞患者
>急性肝不全患者
>Prone position
>Open abdomen
>脊髄虚血

•腸管虚血患者

- ▶腸管虚血患者 ▶ 重应色性喋火
- ▶重症急性膵炎
- ▶腸管蠕動音なし
- ≻胃残量過多
- ≻消化管手術後
- ▶腹部大動脈後

・腹部コンパートメント症候群

≻消化管出血患者

▶腹部コンパートメント症候群

- ▶頭部外傷
- ≻脳低温療法中
- ≻脳卒中患者
- ≻急性肝不全患者
- ➢Prone position
- ➢Open abdomen
- ≻脊髄虚血

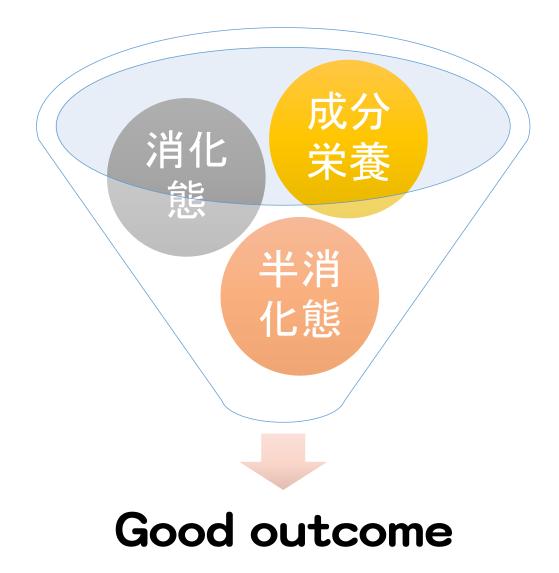
•胃残量 500ml以上 (6時間)

### <u>こんな患者でも早期経腸栄養を施行しても大丈夫?</u> <u>肺炎?腸管虚血?下痢?</u>

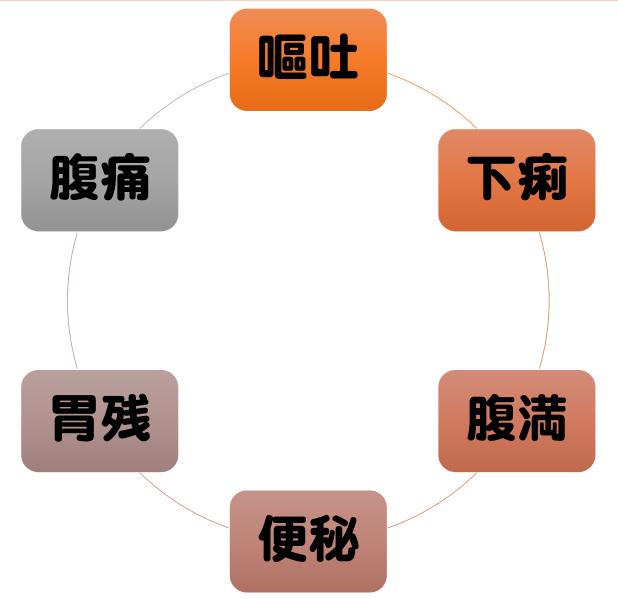
注意する患者

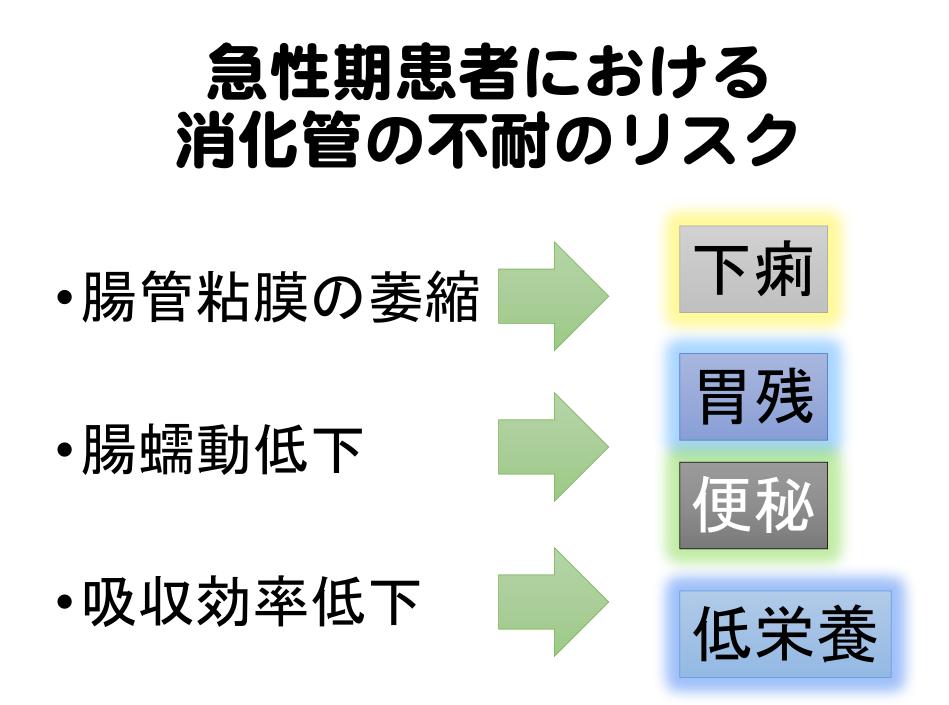
### What?

### -どのような経腸栄養剤が良いか?-



# 急性期患者における早期経腸 にまつわるトラブルとは?



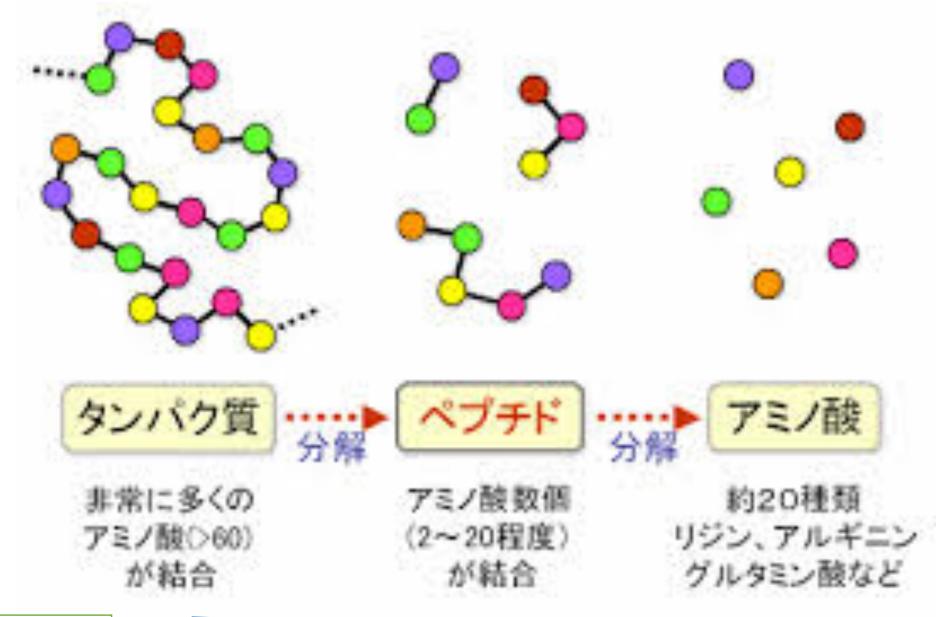


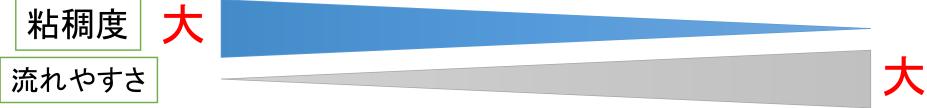
# 早期経腸栄養成功の秘訣



# 下痢を起こさない

## 吸収効率を上げる





### <u>消化態栄養剤もしくは成分栄養剤を選択</u>

・腸へ流れやすい

成分栄養剤>消化態栄養剤>半消化態栄養剤

吸収効率がよい

消化態栄養剤>成分栄養剤>半消化態栄養剤

### 急性期は消化態栄養剤が優れている可能性あり

Clin Nutr. 2017 Jun;36(3):706-709.

Crit Care. 2017 Jun 10;21(1):140.

### How? -栄養投与量はどれくらいがよい?-



# 代表的ガイドラインにみる エネルギー決定

ガイドライン	推奨
ASPEN/SCCM(米国)	目標値:25~30kcal/kg/day 1週間で目標値の50~60%以上達成を目指す
ESPEN(欧州)	急性期:20~25kcal/kg/day以下 回復期:25~30kcal/kg/day
CCPG(カナダ)	記載なし
日本呼吸療法学会	目標値:25kcal/kg/day 1週間で目標値の50%以上達成を目指す



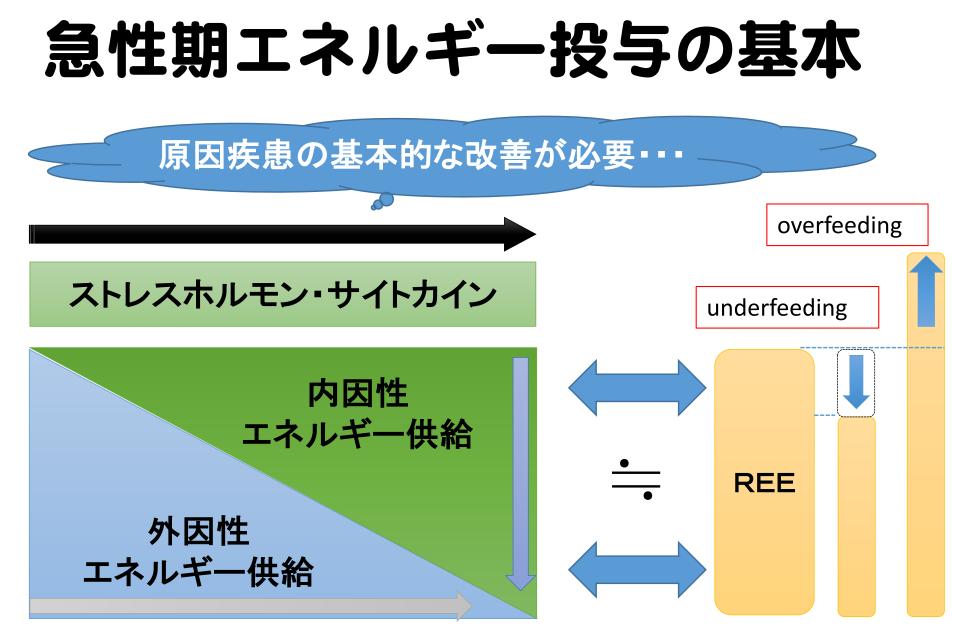
エネルギー供給の2パターン

①内因性エネルギー Autophagy 

・いわゆる異化反応の結果として供給されるエネルギー
・筋肉の分解や脂肪の分解、主に肝でのグリコーゲンの分解

②外因性エネルギー

- ・経口、経腸、経静脈的に外から投与されるエネルギー
- ・いわゆる我々が栄養療法として投与するもの



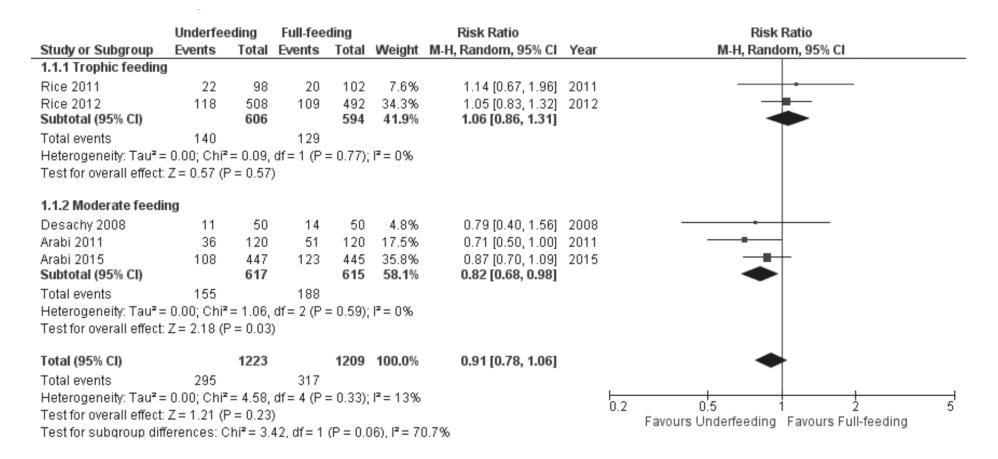
①内因性エネルギー供給+外因性エネルギー供給<REE →真の低カロリー栄養</li>
 ②内因性エネルギー供給+外因性エネルギー供給=REE →指摘エネルギー投与
 ③内因性エネルギー供給+外因性エネルギー供給>REE →実質的なOverfeeding

## **Underfeeding**@controversy

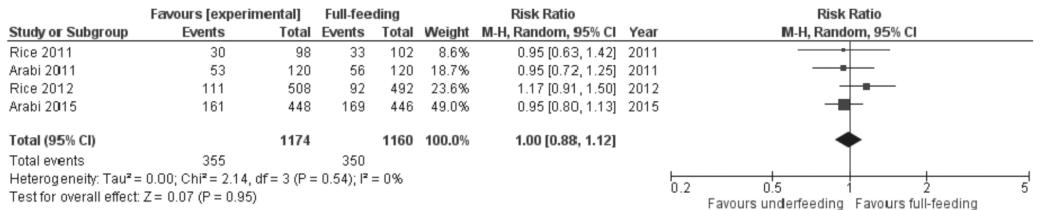
#### Normocaloric versus hypocaloric feeding Systematic review and meta-analysis

#### **Overall mortality**

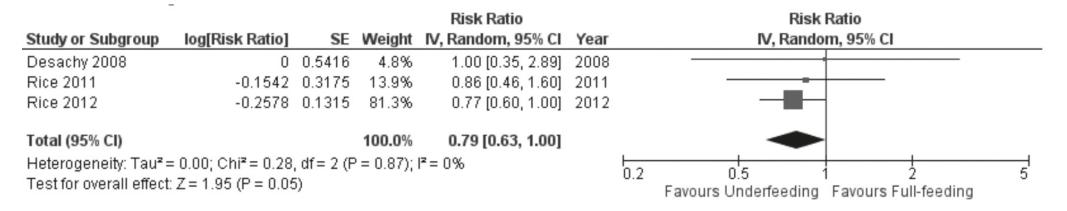
Nutr Hosp. 2017 Feb 22;34(1):19-29.



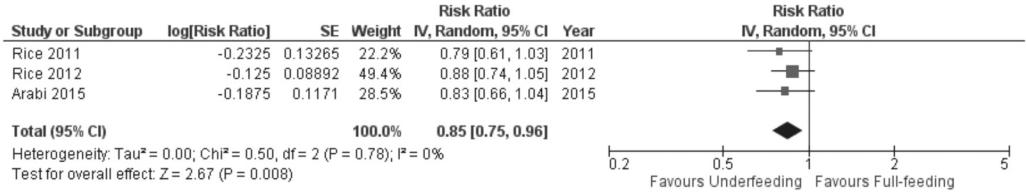
#### Hospital acquired infection



#### Vommiting



#### Diarrhea



## **Underfeeding**@controversy

Underfeedingにメリットあり

- N Engl J Med. 2011 Aug 11;365(6):506-17
- N Engl J Med. 2016 Mar 24;374(12):1111-22
- JAMA. 2012 Feb 22;307(8):795-803
- Crit Care Med. 2011 May;39(5):967-74

### Underfeedingにメリットなし

- N Engl J Med. 2015 Jun 18;372(25):2398-408.
- J Crit Care. 2016 Oct;35:110-4
- JAMA. 2014 Aug 6;312(5):514-24.

### <u>対象患者、重症度、プロトコル、などにふっても異なる</u>

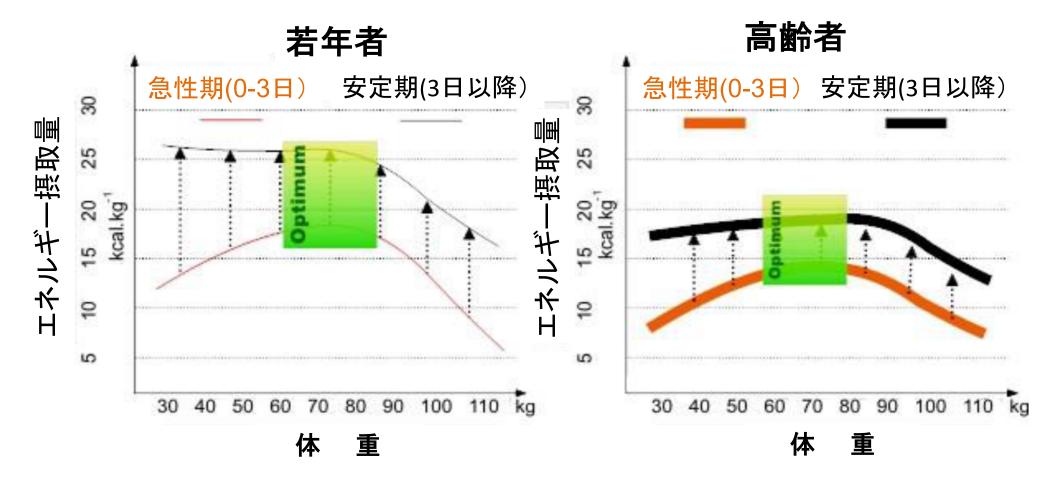
# 重症患者における栄養評価

#### Nutrition Risk in Critically ill (NUTRIC) Score

Variable	Range	Points	
Age	<50	0	
	50 - <75	1	
	<u>≥</u> 75	2	
APACHE II	<15	0	
	15 - <20	1	
	20-28	2	
	<u>&gt;</u> 28	3	
SOFA	<6	0	
	6 - <10	1	
	<u>≥</u> 10	2	
Number of Co-morbidities	0-1	0	
	<u>≥</u> 2	1	
Days from hospital to ICU admission	0-<1	0	
	<u>≥</u> 1	1	
IL-6	0 - <400	0	
	<u>≥</u> 400	1	

Sum of points (IL-6 available)	Sum of points (no IL-6 available)	Category	Explanation
6-10	5-9	High Score	<ul> <li>Associated with worse clinical outcomes</li> <li>These patients are the most likely to benefit from aggressive nutrition therapy.</li> </ul>
0-5	0-4	Low Score	<ul> <li>These patients have a low malnutrition risk.</li> </ul>

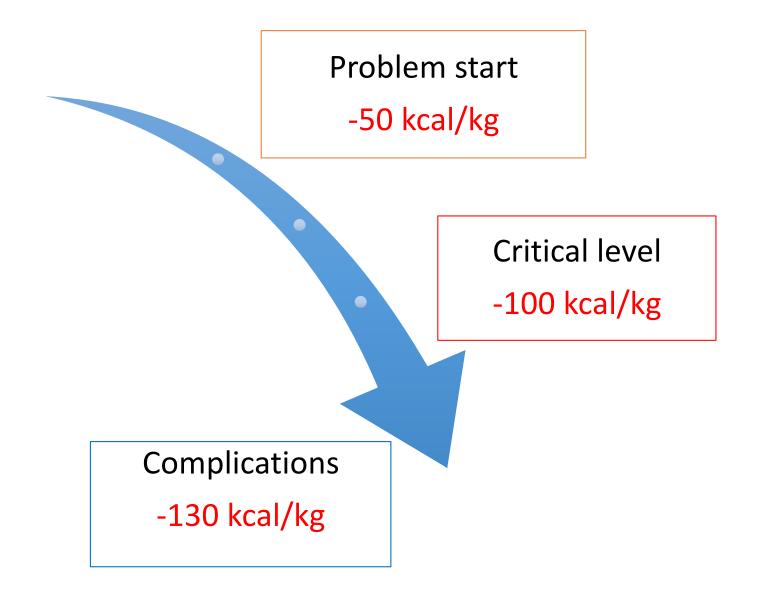
### 若年者および高齢者の急性期・安定期 における体重あたりのエネルギー量



Optimum: 適正範囲

Hiesmayr MJ et al: Energy and protein target: How to prevent underfeeding, overfeeding and refeeding syndrome, ICU nutrition: Treatment and problem of solving:ESPEN LLL Program 2014.(http//Illnutrition.com (2014年11月現在))

# エネルギー欠損とアウトカム



# How? -目標タンパク投与量は?-

#### 内因性エネルギー供給のために体内のタンパク質を供給



## 代表的ガイドラインにみる 蛋白投与量の推奨

ガイドライン	推奨
ASPEN/SCCM(米国)	BMI 30~40:2.0 g/kg IBW/day 以上 BMI 40以上:2.5 g/kg IBW/day 以上
ESPEN(欧州)	PNの場合:1.3~1.5g/kg IBW/day 以上
CCPG(カナダ)	推奨なし
日本呼吸療法学会	1.2~2.0 g/kg IBW/day 以上



# 各病態における必要タンパク質量

•外傷:1.2-1.5g/kg/day •熱傷:1.5-2.0g/kg/dav •透析患者:1.2-1.5g/kg/day

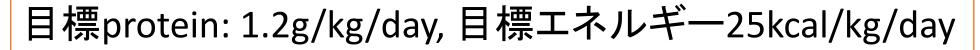
JPEN J Parenter Enteral Nutr. 2016 ;40(2):159-211

## New Recommendations from International Expert Groups Call for Higher Protein Intake in Older Adults

			Up to 2.0 g/kg
		1.2-1.5 g/kg	
	1.0-1.2 g/kg	Acute or	Severe illness or injury or marked
0.8 g/kg	Minimum Protein intake for healthy	chronic disease	malnutrition
Current	New Recor	nmendations	s > 65 years

#### Clinical Outcomes Related to Protein Delivery in a Critically III Population: A Multicenter, Multinational Observation Study

JPEN J Parenter Enteral Nutr. 2016; 40:45-51



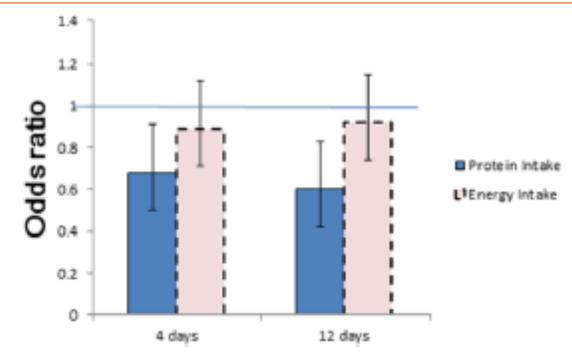


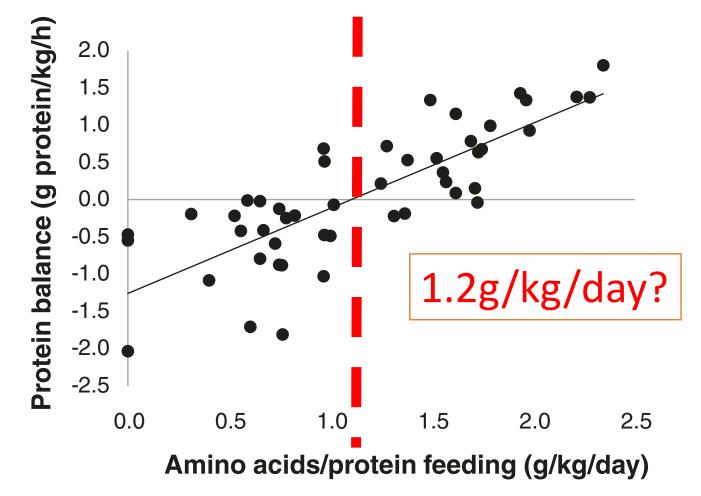
Table 2. Mortality Outcomes Relative to Protein and Energy Intake Delivered.
--

	Patients in ICU ≥4 d: 60-Day Mortality, Odds Ratio (95% CI)		Patients in ICU ≥12 d: 60-Day Mortality, Odds Ratio (95% CI)			
Variable	Unadjusted	Adjusted <sup>a</sup>	Adjusted	Unadjusted	Adjusteda	Adjusted
Protein intake (mean daily delivery ≥80% of prescribed vs <80%) Energy intake (mean daily delivery ≥80% vs <80% of prescribed)	0.67 (0.52, 0.87) 0.76 (0.62, 0.94)	0.63 (0.47, 0.84) 0.73 (0.58, 0.91)	0.68 <sup>b</sup> (0.50, 0.91) 0.89 <sup>c</sup> (0.71, 1.12)	0.65 (0.45, 0.94) 0.78 (0.58, 1.04)	0.58 (0.38, 0.86) 0.72 (0.51, 0.997)	0.60 <sup>b</sup> (0.39, 0.93) 0.92 <sup>c</sup> (0.65, 1.30)

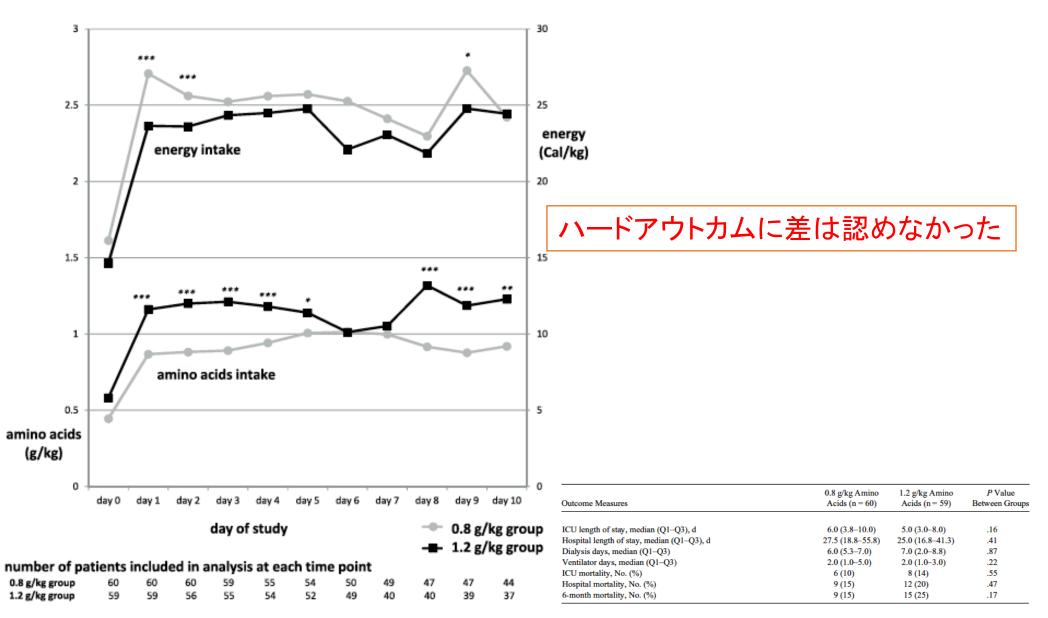


# Short-term amino acid infusion improves protein balance in critically ill patients

Liebau et al. Critical Care (2015) 19:106



#### Protein Requirements in the Critically Ill: A Randomized Controlled Trial Using Parenteral Nutrition



#### JPEN J Parenter Enteral Nutr. 2016 Aug;40(6):795-805

## 最適なNPC/N比は?

## NPC/N比:アミノ酸の投与量の目安 非タンパクカロリー/窒素比

# 慢性期:150-200が推奨されている 急性期:100以下が推奨されている? 侵襲が大きくなるにつれてタンパク質必要量が増加

# NPC/N比にまつわる最近の流れ

### 必要なエネルギー量は症例(時期) ごと異なる

### 必要タンパク量は症例ごと異なる

### よってNPC/N比は結果として決まる

### 最初からNPC/Nを目標に栄養投与計画を立てるわけではない



# How? -経腸栄養プロトコルは必要か?-

最新版SCCM/ASPENガイドライン

Clinical Guidelines

Guidelines for the Provision and Assessment of Nutrition Support Therapy in the Adult Critically Ill Patient: Society of Critical Care Medicine (SCCM) and American Society for Parenteral and Enteral Nutrition (A.S.P.E.N.)

JPEN J Parenter Enteral Nutr. 2016



Journal of Parenteral and Enteral Nutrition Volume 40 Number 2 February 2016 159–211 © 2016 American Society for Parenteral and Enteral Nutrition and Society of Critical Care Medicine DOI: 10.1177/0148607115621863 jpen.sagepub.com hosted at online.sagepub.com

栄養プロトコルを推奨



<u>アウトカムは?どんなことに効果がある?</u>

## Reducing the incidence of nosocomial infections

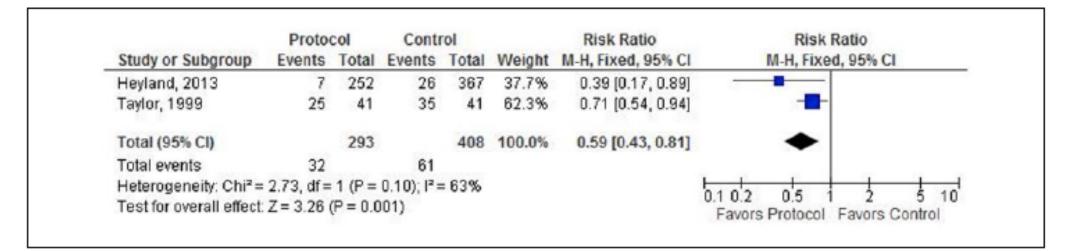


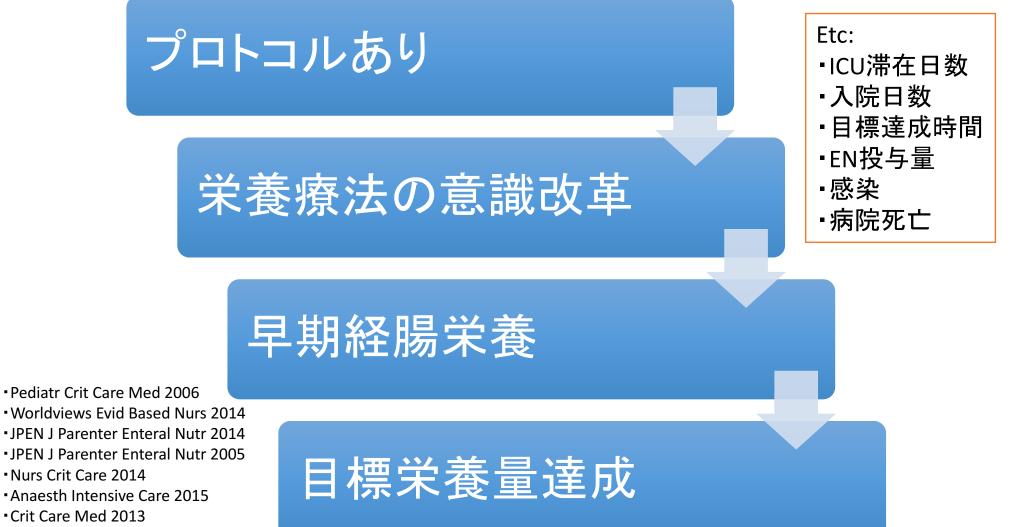
Figure 6. Feeding protocol vs control, infections.



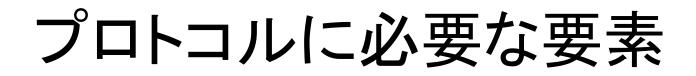
ICU領域における栄養プロトコルは効果あり その所以は・・・ 早期経腸栄養が達成される? トータルカロリー達成率が上昇する?

# プロトコルによるメリットは?

Feeding Protocol review: Crit Care Nurse. 2017 Apr;37(2):e15-e23.



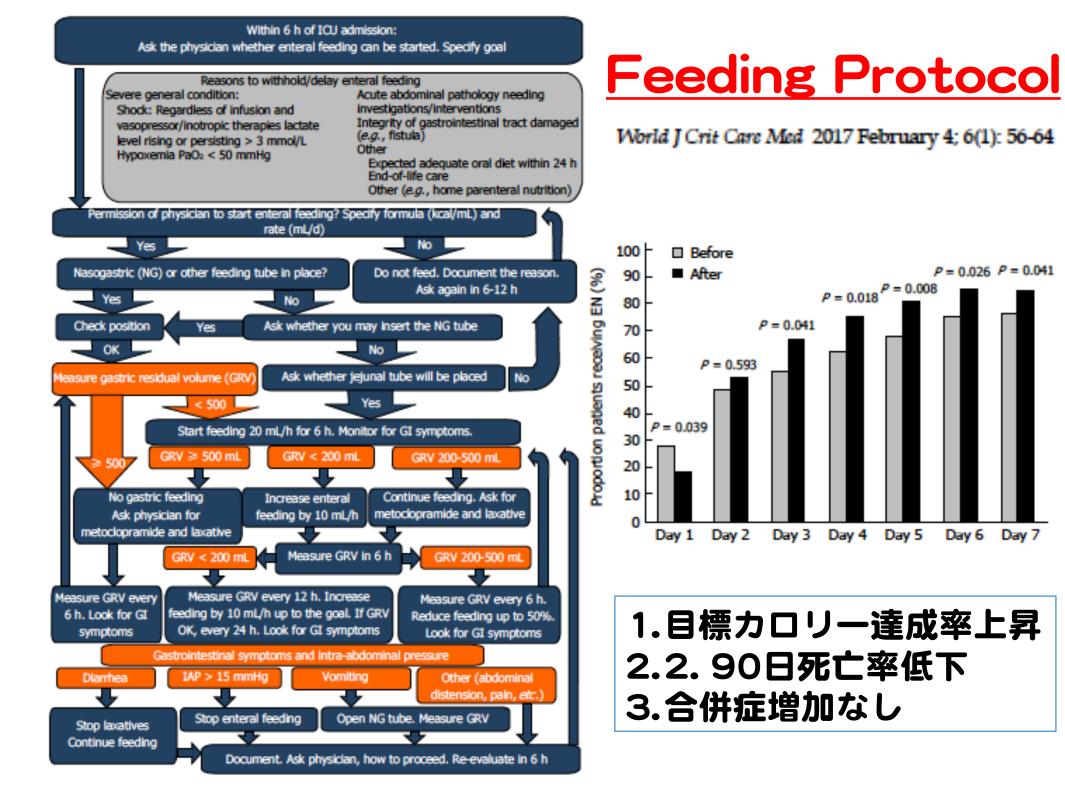
Clin Nutr 2010











## 当院経腸栄養プロトコル

基本的には人工呼吸管理中および重症患者は持続を選択する

チューブ先端:胃でも小腸でも構わない。

開始速度:10ml/hr(最低速度:プロトコールに従って5ml/hrの投与速度になったら一度中止)

胃残(Gastric empty)チェック:4時間毎

安

4時間毎に以下に従って速度を調整する。基本的には引けたものは破棄する。

プロトコールに従って一度offとなった後は4時間の胃残が20ml以下ならば10ml/hr投与再開とする。 ※判断に迷うときにはDr callすること。

	①胃残量		
	4時間の投与量合計の	経腸栄養の速度	対応
	1/4以下	+5ml.hr	経過観察
	1/4-1/2	同じ速度を維持	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
	1/2以上	-5ml/hr	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
	②嘔吐		
	1回/8時間	+5ml/hr	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
ムを	王王	ア開始教育学生	
$\pm 11$	里倪の	石間で	叩いて渡るプロ
	0回/8時間	+5ml/hr	経過観察
	1-2回/8時間	同じ速度を維持	経過観察
	3回/8時間	半分の速度に変更	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
	4回/8時間	半分の速度に変更	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
	④経腸栄養による腹痛	Drは以下参照して投与量変更	
	なし	同じ速度を維持	経過観察
	あり	Dr call	Drは判断次第で半分の量に減量もしくは薬剤投与を考慮。
	5腹部膨満		
	経過記録に記載		排便コントロールを考慮
	⑥腸蠕動音		
	経過記録に記載		
	※Drは上記プロトコール	。 を運用する際にけ単義指示第	ー 第に「学養プロトコール参昭 日標カロリー

※Drは上記プロトコールを運用する際には栄養指示簿に「栄養プロトコール参照 目標カロリー ○ kcal/day、目標スピード○ ml/hr」と記載すること。 基本的には人工呼吸管理中および重症患者は持続を選択する

チューブ先端:胃でも小腸でも構わない。

開始速度:10ml/hr(最低速度:プロトコールに従って5ml/hrの投与速度になったら一度中止) 胃残(Gastric empty)チェック:4時間毎

4時間毎に以下に従って速度を調整する。基本的には引けたものは破棄する。

プロトコールに従って一度offとなった後は4時間の胃残が20ml以下ならば10ml/hr投与再開とする。 ※判断に迷うときにはDr callすること。

①胃残量		
4時間の投与量合計の	経腸栄養の速度	対応
1/4以下	+5ml.hr	経過観察
1/4-1/2	同じ速度を維持	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
1/2以上	-5ml/hr	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
②嘔吐		
1回/8時間	+5ml/hr	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
2回以上/8時間	経腸栄養を一時中止	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮

<b>•---</b>		
③下痢		
0回/8時間	+5ml/hr	経過観察
1-2回/8時間	同じ速度を維持	経過観察
3回/8時間	半分の速度に変更	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
4回/8時間	半分の速度に変更	Dr.callし薬剤・経腸栄養製剤を考慮
④経腸栄養による腹痛	Drは以下参照して投与量変更	
なし	同じ速度を維持	経過観察
あり	Dr call	Drは判断次第で半分の量に減量もしくは薬剤投与を考慮。
⑤腹部膨満		
経過記録に記載		排便コントロールを考慮
⑥腸蠕動音		
経過記録に記載		
※Drけ上記プロトコール	を運用する際には栄養指示領	。 竈に「栄養プロトコール参昭 日標カロリー

※Drは上記プロトコールを運用する際には栄養指示簿に「栄養プロトコール参照 目標カロリー ○○kcal/day、目標スピード○○ml/hr」と記載すること。

### 目標投与量の選択:15kcal/kg/day,20kcal/kg/day,25kcal/kg/day (全身状態を評価して選択)





## 経腸栄養開始基準

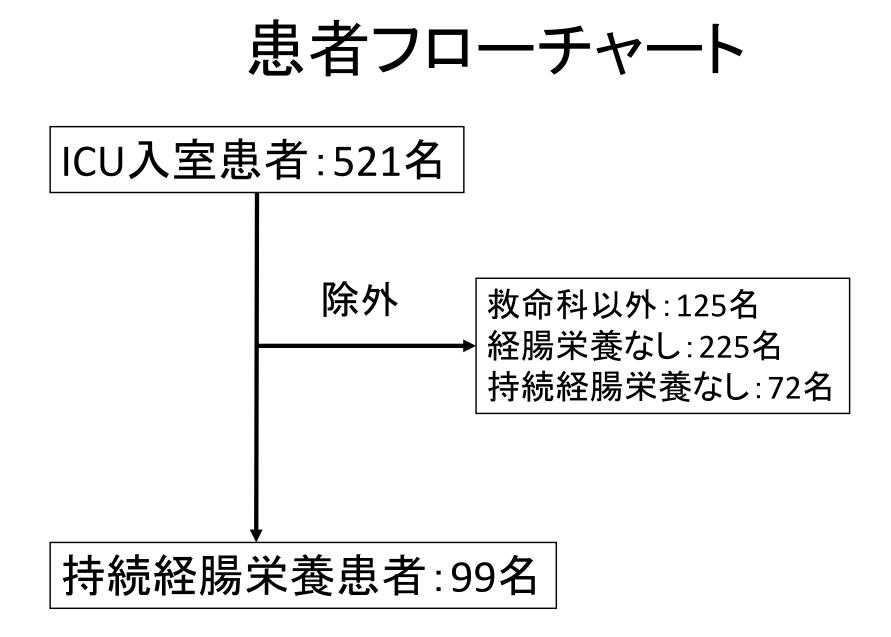
- •経口摂取不可能
- 消化管に栄養投与禁忌がない
- •Activeな輸液蘇生を行っていない(昇圧剤投与量は問わない)

## 静脈栄養開始基準

・ICU入室1週間以内に経腸栄養により15kca/kg/dayのエネルギー 投与が行えない場合(見込みでも可)

## 研究方法

研究デザイン	• 後方視的観察研究
研究期間	• 2015年1月-2015年12月(2013年3月プロトコル 開始)
対象患者	• 経腸栄養プロトコルを使用したICU入室患者
測定項目	<ul> <li>・患者背景、その他経腸栄養プロトコル開始後 72時間までの種々のデータ</li> </ul>
評価項目	<ul> <li>①経腸栄養開始時期、②目標カロリー到達率、</li> <li>③プロトコル中止率、④消化器合併症率</li> </ul>

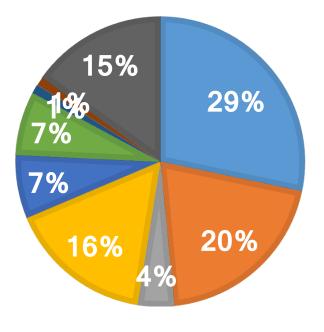


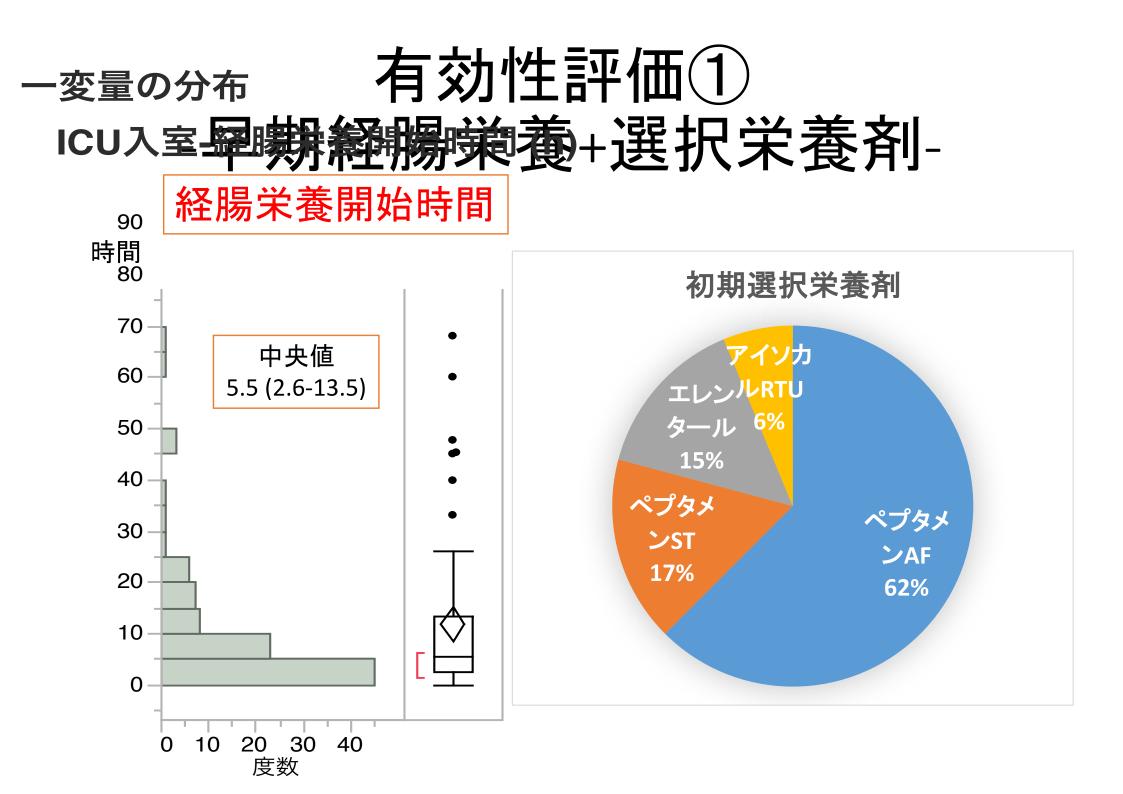
# 患者背景

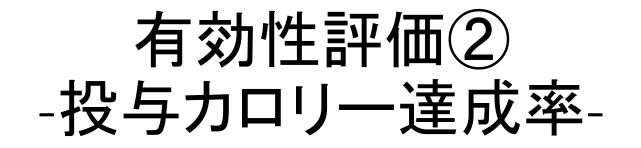
Variables	
年齡, year, median (IQR)	70 (56-78)
性別, 男, n (%)	69 (69.7%)
APACHE 2, median (IQR)	22 (14-30)
SOFA, median (IQR)	8 (5-11)
BMI, median (IQR)	21.4 (18.8- 24.3)
腹部術後, n (%)	11 (11.1%)
人工呼吸器 <i>,</i> n (%)	77 (77.8%)
鎮静薬 <i>,</i> n (%)	33 (33.3%)
最大NoA量 (γ) <i>,</i> median (IQR)	0 (0-0.14)
最大フェンタニル量 (γ) <i>,</i> median (IQR)	30 (10-50)
入院期間, days	16.0 (5.6-36.2)
ICU死亡 <i>,</i> n (%)	28 (28.3%)
院内死亡 <i>,</i> n (%)	32 (32.7%)

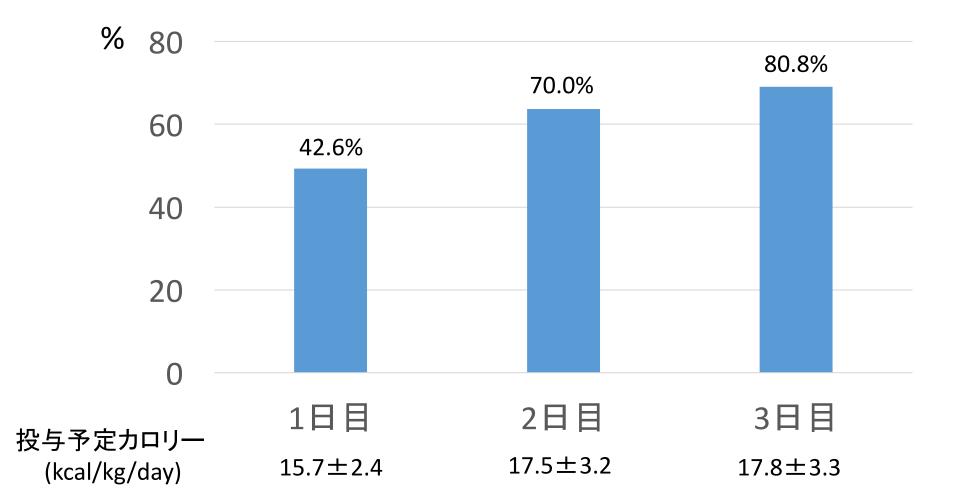


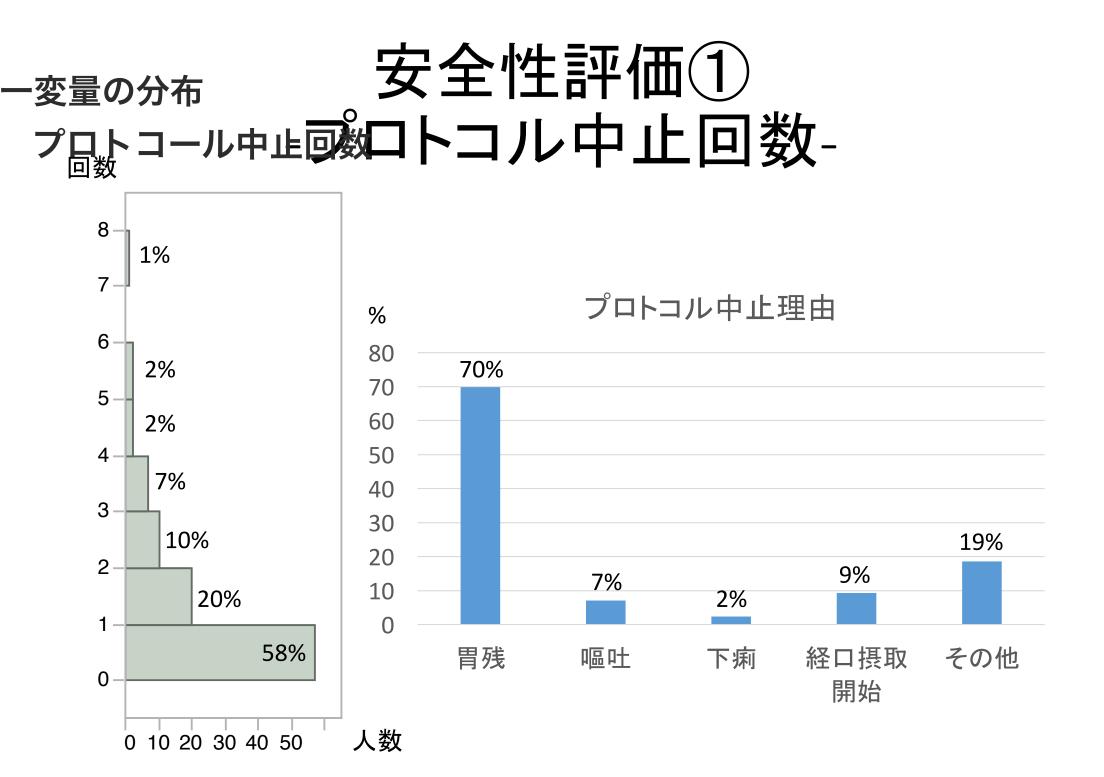


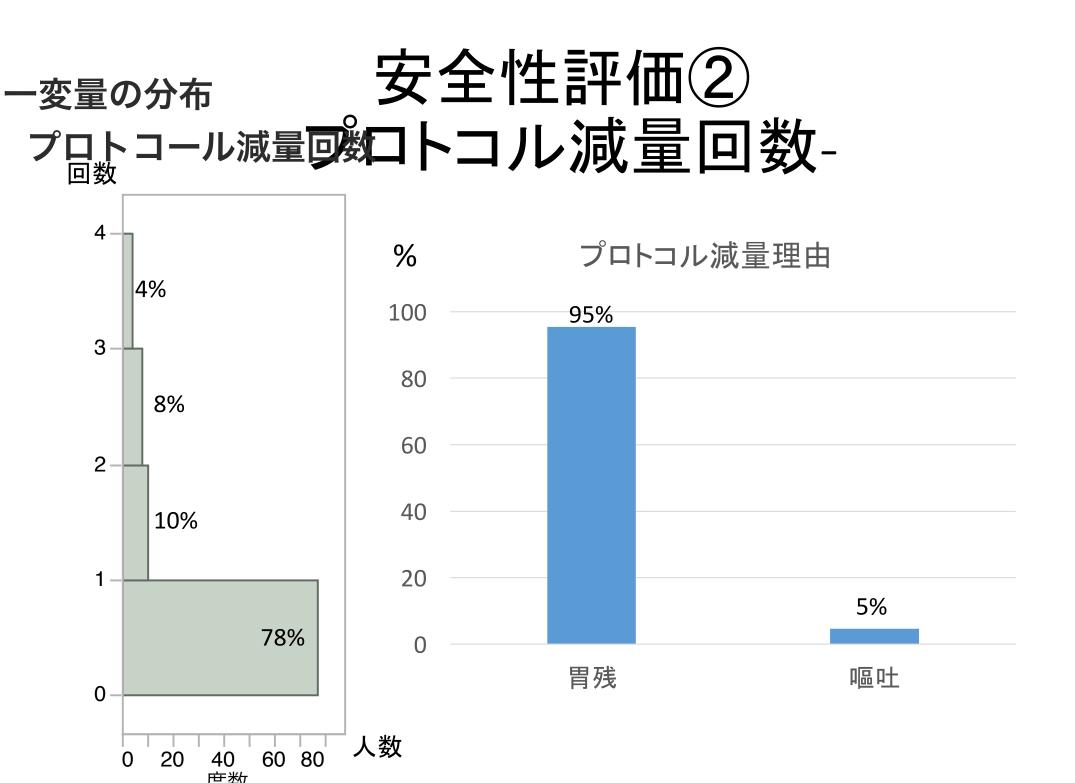


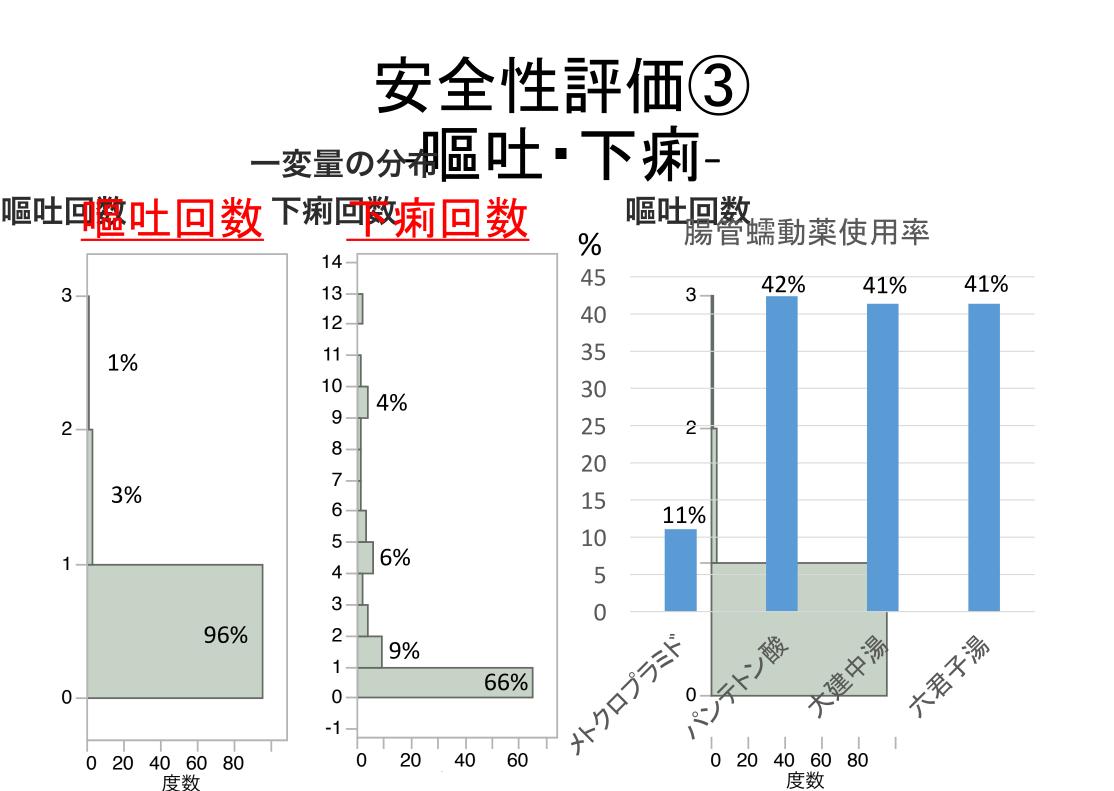












## 本研究のまとめ・考察

- 早期経腸栄養達成
- ・目標栄養投与量率まずます
- 安全性重視の少量増量プロトコルでも胃残量でプロトコル中止・減量になることがあった
- ・プロトコル中止・減量となっても嘔吐の合併は少なかった。

安全性重視のプロトコルとしては合格 Limitation:前後比較が出来ていない

## 看護師の思うところ・・

### プロトコール運用開始し1年後に、 プロトコール運用開始後の意見や質問等を自由記載

◆医師への報告や相談するきっかけができた

- 4時間毎に胃残確認をするので、その都度栄養について考えるきっかけができた
- 報告基準があるため、どういう時に報告しなければならないのか考えることができた
- ◆申し送りやカンファレンスで話し合う機会ができたことで栄養管理についての意識が高まった
  - プロトコール運用していることで、申し送りやカンファレンスで必ず話すことになるので、意識するようになった
- ◆ それぞれの項目で増量・減量となった場合、どうしたらよいか
  - プロトコールの項目に、胃内残渣だけでなく、嘔吐、下痢、経管栄養による腹痛の項 目で増減することになっているので、一つの項目で維持となり、もう一つの項目で減 量となった時が迷う
- ▶ 観察項目のカルテへの記載方法が分からない
  - 記録をどう残したらいいか分からない

## Take Home Message

- ▶早期経腸栄養の目的は"腸管機能維持"である
  ▶早期経腸栄養はICU入室24時間以内に開始する
- > 経腸栄養剤は消化態栄養剤が効果的である
- >ICU入室4日以内に病態にあわせた目標タンパク質 量 (1.2-1.5g/kg/day)を目指す
- ▶重症患者に対する早期経腸栄養の栄養投与量は Overfeedingを避けて病態にあわせた設定にする
- ▶早期経腸栄養を効果的にかつ安全に施行するためのプロトコールが推奨される